第七回世界俳句協会日本総会に参加して

石倉秀樹　日本
Hideki Ishikura　Japan

ＮＰＯ法人世界俳句協会の「第七回世界俳句協会日本総会」が二〇一二年四月二九日（日）、東京の板橋区立グリーンホールで開催され、首都圏の会員を中心に、三〇名ほどが参加した。奈良県、兵庫県、愛媛県からの参加もあった。

会場には毎年実施されている世界俳句協会「俳画コンテスト」参加作品一〇点とコンテスト担当の清水国治作品五点が展示され、参加者は、まず眼で楽しむことができた。なお耳は、午後四時からの俳句朗読。

総会は午後一時開会、冒頭、夏石番矢ディレクターは開会のメッセージとして、二〇一一年の活動報告、機関誌『世界俳句二〇一三』への参加勧奨とともに、二〇一三年九月六日から八日まで南米コロンビアのメデジンで開催予定の「第七回世界俳句協会大会」に触れた。メデジンは、毎年大規模な国際詩歌祭が開かれる都市として世界に知られている。夏石ディレクターのメッセージは、日本語、英語で You Tube にアップされ、総会に参加できなかった内外の会員も視聴できる。

日本語　http://youtu.be/y0zu0oMNZtE　　英語　http://youtu.be/h-z9ojxDQaQ

次に参加者各自の自己紹介、その発言は、俳句についてそれぞれに一家言あり、また、作風あり、作句に背景ありで、楽しかった。夏石ディレクターが、俳句は形式ではなくジャンルである、といえば、形式ではなくプラットフォームである、という会員がおり、自由律で作っている、という会員がいれば、俳句は定型で作っている、という者もいた。英語の押韻俳句から俳句を始めたが今は日本語、という会員もいるし、日本人だが英語で作句、アメリカで句集を出版した、という会員がおり、朗読の翻訳は英語ではなくスペイン語、という会員がおり、漢詩の韻律準拠の作句をしている私のごときもいる。世界俳句協会は、全ての言語において俳句は可能、ということを踏まえて運動を推進しているが、俳句を豊かにしているのは、言語ばかりでなく、全ての俳句作家それぞれの多様な矜持があってのことだ、と改めて思った。

自己紹介に続き、世界俳句協会が事務局を勤めた「第二回東京ポエトリー・フェスティバルと第六回世界俳句協会大会二〇一一」の実施結果報告、『世界俳句二〇一二第八号』の刊行報告と『世界俳句二〇一三第九号』の刊行計画、俳画コンクールの推進、世界俳句協会の会計報告などの議事が進められた。また、コロンビアの「第二一回メデジン国際詩歌祭」（夏石番矢）、インドの「第七回国際詩歌祭 KRITYA」（鎌倉佐弓）、「第一回ヴェトナム国際詩祭」（夏石番矢）への参加が報告された。

午後三時からは、東京大学名誉教授で比較文化史家の平川祐弘先生による講演『世界と俳句』。氏の研究分野は、比較文学比較文化で、『ルネサンスの詩』、『和魂洋才の系譜』『小泉八雲―西洋脱出の夢』『ラフカディオ・ハーン―植民地化・キリスト教化・文明開化』『ダンテ『神曲』講義』など多くの著書があり、広い視野のもとに多くの識見を展開されているが、総会では、日本の俳句が世界へどう紹介されたかに絞ってお話しいただいた。

お話は、日本の俳句を世界に紹介した人々の翻訳がどのようなものであったかを、実例に即して見てみるこ

とから始まった。日本の俳句を数多く英語に翻訳した最初の人物ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）。そのことは私もすでに知っていた。しかし、先生のお話は深く、ハーンがなぜ日本の俳句に興味を持ったかに触れられた。ハーンは、来日する前にカリブ海のマルティニク島に二年間滞在、アフリカからの奴隷の子孫が話すクレオール語の文化に興味を抱いた。クレオール語はフランス語をもとにしているが、文字がなく文法も雑駁で、一般にはフランス語の腐ったものと思われており、その文化に注目する者はいなかったが、ハーンはそのクレオール語のことわざや格言、数多くの怪談、フォークロアを面白いと思い、それを蒐集し、記録している。そして、ハーンは、マルティニクでやったことを日本でも繰り返したというのが先生のお話。そして、ハーンが日本で見つけたのは、およそ西欧人には詩の対象になるとは思われてはいないロバや猿、同様に蛙や蝉などが、日本の短歌や俳句では重要な詩材となっているということだった。蛙は西欧では聖書で悪魔の手先とされていることもあり不気味な動物、蝉は明治の日本へやってきたピエール・ロティやバジル・ホール・チェンバレンらにとっては喧しく耳障りな虫に過ぎなかった。しかし、ハーンはその蝉の声を快い、と思った。そして、ハーンは、西欧ではなじまれていないカエルやトンボ、チョウなどに対し、日本人はどう感じているのかを知りたい、と思い、俳句を広く蒐集し、翻訳した。以下に実例二例。

楠も動くやうなり蝉の声　　梅雀
Even the camphor-tree to quake with the clamor of sémi!

日さかりは煮立つ蝉の林かな　　露英
In the hour of heaviest heat, how simmers the forest with sémi!

蝉はイギリスにいない。そこで、英訳は今ではラテン語の学名に由来する cicada が使われるが、ハーンは sémi とせざるをえなかった。

先生のお話はそのハーンに刺激されて多くの俳句を翻訳し、俳句を西欧へ伝えたチェンバレン、フランス語の最初の句集を出したポール＝ルイ・クーシュー、第一次大戦の惨状を詠んだ句集『戦争百景』のジュリアン・ヴォカンス、俳句に注目しイマジストの運動を始めたエズラ・パウンド、日本の俳句を西欧に伝えた最大の功績者で、平川先生の恩師でもあるレジナルド・ブライス、俳句の根底にある神道のことなどへと、実例を踏まえ縦横に展開、会場がなごむ軽妙なジョークもまじえお話しいただいた。先生のお話を聴きながら、私には、西欧の既成の価値観にとらわれないハーンの好奇心、探究心に、常に自分の眼で見、自分の頭で考え、一歩先へと進んでいた芭蕉の姿が重なる思いがあった。そこで、ここでもハーンに多く触れてしまったが、講演の全容は、You Tube（日本語　http://youtu.be/mmUal-bGvow）で視聴できる。

そして、講演の最後は、笹久保伸さんのギターをバックに、夏石番矢『空飛ぶ法王』に唱和する8句を朗読され、会場が沸いた。そのうちの三句

空飛ぶ法王まばゆき今日の初日の出　　平川祐弘
日英の句を両翼に鳳凰昇天す
夏石番矢を読んだら落ちる空飛ぶ法王

総会のしめくくりは恒例の俳句朗読。俳句朗読を希望したのは一九名、笹久保伸さんのギターが朗読をもりあげてくれた。以下、朗読順に各自数句のうちの一句を挙げる。

憑虚水底凍金魚（虚によるや水の底なる凍金魚）　　石倉秀樹
鶯や冬の抜けがら食べて鳴く　　乾　佐伎
去年今年地球をまわす神がいる　　梅澤鳳舞

砂ひとつぶが夕焼の正体　鎌倉佐弓
太刀魚の跳ねる光や「魚の棚」　小泉龍徳
海は成る神のしたたる鼻水で　佐藤和泉
読経のなかに融けいく春時雨　早乙女文子
キラウエア火山／ペレの子ら行進のかけ声／響かせる　ロザリンド・ハリス（清水国治代読）
原付を飛ばしハスの実飛んでいく　マキ・スターフィールド
淋しい脚を組む　そねだ・ゆ
太陽の裏に萌え出すレタスの芽　丹下尤子
風をたっぷり食べ鯉のぼりがメタボだよ　中塚唯人
桐一葉覆いて染める瓦礫山　長塚弘
空飛ぶ法王針千本が刺さっている　夏石番矢
牽いているうちに毛布となる駱駝　長谷川裕
El camello / al jalarla / se va hacienda manta
大吉引く手桶の水の痛きまで　大里満紀
シャム双生犬／分割され／片方がもう片方を食す　堀田季何
車椅子森へ光を運びつつ　松岡秀明
風流る小瓶の影の青の中　山本一太郎